

日本人の宗教と動物観

中村 生雄 著

(吉川弘文館・2730円)



なかむら・いくお
1946～2010年。思想家
史家。著書に『日本の神と王権』『祭祀と供犠』など。

東京新聞

2010.09.26

丹念に思考を練りあげ日本人と日本文化を見きわめようとした日本思想史の研究者中村生雄が、自らのいのちと向き合いながら宗教と動物、殺生と肉食に関する近年の論考を選び集め、逝った。

現代人の心をいやすために飼われるペットのゆえを論じた「ペット殺し社会、日本」。動物虐待への苛烈なバッシングと殺処分のために「ドリームボックス」に送られるペットたち―その奥に見えてくる現代日本人の心を見つめ続ける。

肉食を肯定することで人間中心主義に陥ってし

まっ思想家・鈴木大拙、本能的で生理的な反応からベジタリアンに転じた宮沢賢治らを足がかりとした論考「殺生と肉食」では、中村が近年こだわりの抜いたテーマが深められる。歴史的にみると、

仏教では殺生と肉食はセツトになっておらず、神道的な穢れ(浄/不浄)観念が結合することで、動物殺しと肉食禁止がよい相関性を持つことになった。そこに日本人の人と動物との関係の本質が見いだせると言う。

「鯨墓と鯨供養」では日本の漁民たちの相反した「鯨」観―子を連れ

殺生、肉食する心を見つめる

母鯨の行動にみられる母性愛への共感と、子鯨を護つうとする習性を一挙両得の狙い目と考える漁師の立場との二重性を指摘し、その複雑な関係を各地の鯨墓や鯨供養の取材、文献資料の分析を通して明らかにする。

その他、文化的・思想的にシンボリックな存在に持ち上げられた近代のニホンオオカミを論じ、狩猟文化や殺す文化と食べる文化を論じながら、中村は日本人の心(宗教)を批判的に見つめ続ける。その思考はつねに現代を視野に入れた文化論であり、文化ナシヨナリズムの超克をめざす姿勢は冷徹で揺らがな。それでいて、いつも暖かなまなざしに満ちているのが魅力だ。

すべての生き物は死に向かいながら、自らのいのちをはぐくんでいる。その当然の事実を、あらためて教えられた。

評者 三浦佑之

(立正大教授)